

枝変わり探索により選抜した晩生みかん ‘18-2’

和歌山県果樹試験場 栽培部 田嶋 皓

1. はじめに

近年の気象変動の影響により、11～12月にかけてウンシュウミカンの果実には、浮皮をはじめとする果皮障害が多発し、高品質果実の安定生産が困難な事例がみられます。また、一般に晩生ウンシュウミかんは、樹勢が強く樹高が高くなりがちで高所作業が必要になります。さらに老木園では、隔年結果樹の増加により生産が不安定となり、園地の維持が困難になっています。そのため果樹試験場では、JA、普及組織とともにウンシュウミカンの枝変わり探索に取り組み、既存の晩生ミかんより樹勢が弱く比較的栽培が容易であり、浮皮が少ない‘18-2’（仮称）を選抜しましたので報告します。

2. 来歴

平成18年に、晩生ミかんである‘尾張系’の一樹変異個体（原木は枯死していたため二代目高接ぎ樹）について、果実品質が優れるとの情報提供があったため、‘18-2’（平成18年度に情報提供があった2番目の個体）として、調査を開始しました（図1）。二代目高接ぎ樹は有田川町出にあり、同一園地内に三代目高接ぎ樹および対照品種として‘林温州’、‘尾張系’の高接ぎ樹を用意し、樹体および果実の比較調査を行いました。さらに、有田管内の現地高接ぎ園地でも同様に調査を行いました。その結果、二世帯通じて浮皮が少ない、樹勢が弱くコンパクトな樹形に仕立てられる、などの特性を示したため、2016年度に品種登録候補として最終選抜を行いました。なおウイルス検定を行った結果、二代目高接ぎ樹は温州萎縮ウイルスに感染していたため、茎頂接ぎ木法によるウイルスフリー化を実施し、健全な苗木を育成中です。

3. 特性

1) 樹体について

樹勢は対照品種である‘林温州’、‘尾張系’と比較して弱く、葉は小さいです（図2）。枝梢は伸びたあとやや下垂します。

2) 果実について

果実の収穫適期は12月で、‘林温州’、‘尾張系’とほぼ同様です。他の晩生品種と比較して、浮皮程度が小さいのが特徴です（図3、表1）。果実品質については、糖度、クエン酸含有率ともに対照品種とほぼ同等です（表1）。

平成27～28年度に現地高接ぎ園地において浮皮程度を調査したところ、‘林温州’と比較して‘18-2’の浮皮程度は小さい傾向でした。なお平成27年の宮原の園地では、対照品種と同様に浮皮が発生しました。初結実で着葉数が少なく過熟気味であったことが要因と考えられます（図4）。

4. 今後の予定

現在、品種登録出願に必要な特性調査を実施中です。今後は、出願手続きの支援を実施するとともに、普及が見込まれる地域において現地調査を開始する予定です。なお、スムーズに品種登録がなされた場合、早くも3年後に苗木の流通が始まる予定です。



図1 '18-2'の果実

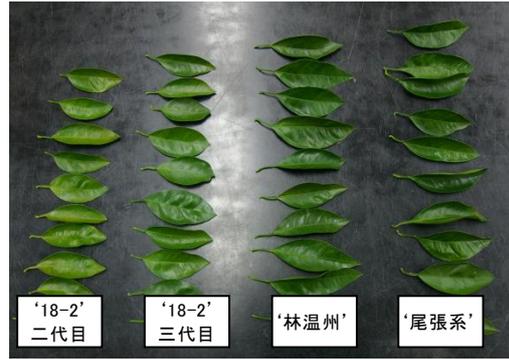


図2 対照品種との葉の比較

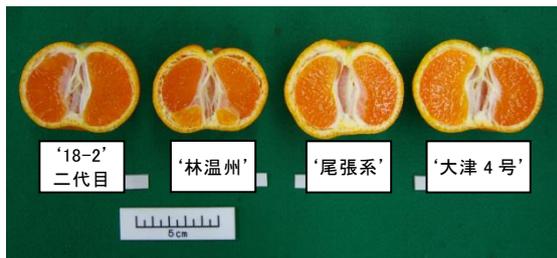
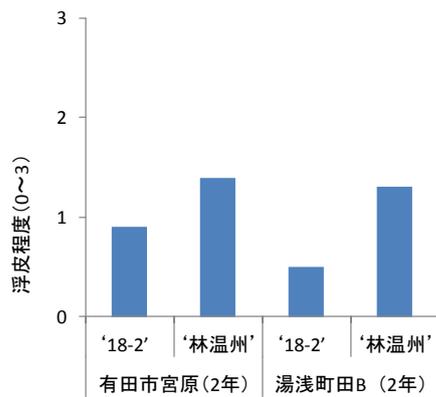


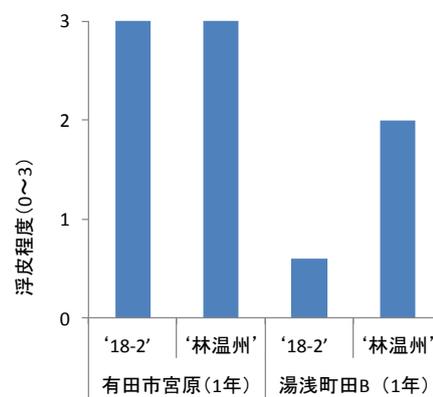
図3 対照品種との果実の比較

表1 '18-2'と対照品種の果実品質(有田川町出)

調査日	品種・系統名	横径 (mm)	果形指数	果実重 (g)	糖度(%)	クエン酸含 有率(%)	浮皮程度
H27.12.9	'18-2' 三代目	65.5	135	107	10.0	0.71	0.9
	'林温州'	65.7	133	104	9.5	0.94	1.6
	'尾張系'	67.1	125	114	10.6	0.95	1.6
H28.12.12	'18-2' 三代目	66.5	132	117	10.7	0.82	0.0
	'林温州'	65.3	128	109	10.5	0.78	0.7
	'尾張系'	66.2	133	107	9.2	0.88	1.1



調査日:平成28年12月8日



調査日:平成27年12月15日

図4 現地における'18-2'と対照品種の浮皮程度

注 ()内は結実何年目かを示す